

特集  
2

# 子どもの危険認識力も高める リスク・マネジメントの実践

掛札 逸美 Kakefuda Itsumi 保育の安全研究・教育センター代表  
筑波大学卒。健診団体広報室に10年以上勤務した後、コロラド州立大学大学院に留学、  
2008年、心理学博士号取得。専門は健康と安全の心理学。



## 「リスク=危ない」ではない

「リスク・マネジメント」と聞くと、危機管理、つまり「悪いことが起きないようにすること」だと考える方が多いかもしれませんが……実は違います。確かに狭い意味、例えば安全だけの世界で見れば、リスク・マネジメントは「悪いことを減らすこと」。でも、広く社会全体で見ると、リスク・マネジメントは「価値とリスクの天秤<sup>てんびん</sup>をかけながら、できる限り価値を大きくする。そうしつつも、リスクが大きくなりすぎないように、まして、価値を超えないようにする取り組み」です。

国際規格である「ISO 31000 : 2009 リスク・マネジメント」の定義を見てみましょう。リスクとは、「目的に対する不確かさの影響」とされています。めざすゴールに対して、良いほうに転ぶか、悪いほうに転ぶか、それが大いに分からない場合を「リスクが大きい」と呼びます。「リスクが大きい=目的に対する不確かさが大きい」、「リスクが小さい=目的に対してあまり不

確かさが無い」なのです。株で大損することもあられるけれど、逆にジャンク株で大もうけをすることもかもしれない(不確かさ/リスクが大きい)。一方、定期預金はあまり得もしない分、まず損もしない(不確かさ/リスクが小さい)、そういうことです。

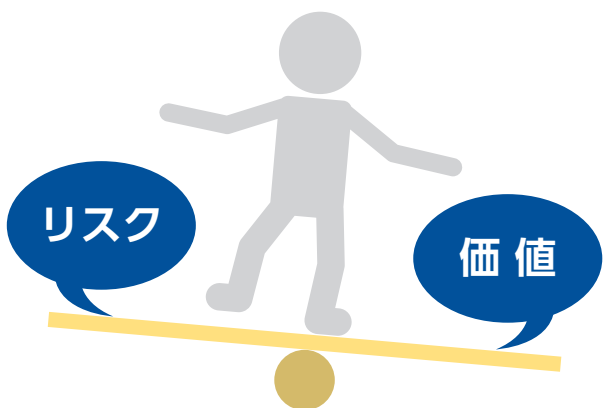
## 子どもは「不確かさが大きい」存在

予測できないのが、子どもの行動です。

- 「できないよね」「しないよね」  
→ できます！ します！
- 「危ないって、なぜ分からないの？」  
→ 分からないのが子どもです(大人は、危ないと分かっている行動さえします)。

子どもは「不確かさ/リスク」の塊。それは悪いことでしょうか？ いいえ。危なさが分かっているからこそ、子どもはいろいろなことを試し、何度も繰り返し、諦めずに「これ！」と思ったことをし続けられるのです。うまくできるはずがないと思っていたことができるようになっていたり、どんどん上手になっていたり……、予測の難しさの裏側にある「良い不確かさ」、これもリスクです。

身のまわりのモノや環境で試し、繰り返し、続けることで子どもは育っていきます。そして、試し、繰り返すということは、失敗もすること。失敗するから、「次はこうしよう」「こうしてみたら、うまくいった」が分かるのです。成長・発達に失敗は必須。子どもが失敗しないよう



に、常に上手にできるように大人が手伝って育てることなどできませんし、失敗を経験せずに育ったら、問題解決のスキルも身に付きません。

失敗の価値を考えれば、付随するリスクはある程度、受容すべきなのです。

## 大人の役目： 失敗の結果を深刻にしない

もちろん、何かに取り組んでいる最中の失敗が子ども自身を傷つけることもあります。一番分かりやすい例がケガ。傷が外から見えて本人が痛がっていたら、命にはほとんど影響がなかったりします。逆に、頭部や腹部のように、外から見えず、子ども自身も平気そうにしているほうが危険だったりもします。

そうしたとき、「(頭/おなか)を打ったかな。心配だから病院で診てもらおう」と大人が判断すれば、脳障害や出血死などといった深刻な結果はほぼ防ぐことができます。「子どもの事故」というとどうしてもケガ予防に目が向いてしまいがちですが、ケガこそ、成長・発達の価値に付随するリスクなのです。

同じケガの中でも、高い所からの転落や交通事故は、命を容易に奪いかねません。また、風呂や川、池などで起こる溺水<sup>できすい</sup>、食品やおもちゃ等で起こる誤嚥窒息<sup>ごえん</sup>、ヒモ状のものによる窒息、毒物や薬、酒類、磁石やボタン電池の誤飲、やけど……、こういった出来事は命にかかわる場合が多々あります。

ところが、擦り傷や切り傷といった日常のケガに比べると、こちらはめったに起こりません。加えて人間の脳には「私/私の家族には、ひどいことは起きない」と感じる認知バイアス(もの見方の歪み<sup>ゆがみ</sup>)もあります。そのため、「起きないだろう」「大丈夫だろう」と思いがち。保護者や保育者だけでなく、子どものまわりにいる大人がすべきことは、日常のケガと、こうした「深

刻な結果につながりがちな出来事」の間に線を引いて、後者をできる限り予防することなのです。

## 深刻な結果につながる出来事は 予防が容易

子どもが走り回り、とび回る以上、日常のケガは予防できません。でも、深刻な結果につながりかねない出来事は、「起こるかもしれない」という目で大人がモノや環境、子ども、自分の行動を見直せば、予防できるものが大半です。

まず、「うちの子は、そんなことしない」「できない」をやめましょう。「きっと、するだろう」「こうすればできるはずだ」が基本です。

- 「ハイハイしている赤ちゃんはテーブルの上のポットに手が届かないはず」  
→テーブルから電気コードがのびていたら？ テーブルクロスが垂れていたら？ 手が届かなくても、ポットは落ちてきます。
- 「ベランダの窓の鍵なんて、開けられるわけがない」  
→いえ、触っている間に開いてしまうかも、出られてしまうかも、そして、ベランダに登れるところがあったら……。

大人の想像力が試されているのだと思って、「子どもはきっとこんなことをするはず」と考えましょう。「できてしまう」を前提にすれば、2歳の誕生日までは浴槽に残し水をしない、風呂場に鍵をつける、ボタン電池が入っているリモコン等はラップで包む……といった対策が出てきます。

もう1つのポイントは、「中途半端にまねたら危険な行動を、子どもの目の前でしない」。典型例は、子どもの目の前で薬を飲む。「何食べてるの?」「薬だからね、苦いんだよ」と言っても、子どもは納得しません。「高い棚の中に

しまえば大丈夫」、いいえ、収納した場所を見ていけば、イスでも何でも持ってきて届くようにしてしまうのが子どもの頑張りです。

かといって、「子どもの目の前でお酒を飲まない」は難しいかもしれません。そうすると、フタの開いた缶入りアルコール飲料を冷蔵庫に置いておかない、冷蔵庫にチャイルドロックを付ける、といった、「できてしまう」を前提にした対策が必要になります。

#### 「できていく」を保障しつつ、 深刻なケガを防ぐには

子どもは失敗しながら、ケガもしながら育つもの。オリンピックの選手だって思わぬ骨折をすることがあるのですから、子どものケガはゼロにできません。とはいえ、ケガを減らす方策はあります。発達段階に合った遊びをし、少しずつ確実にできるようになる、そのような環境と方法を保障することです。

例えば、「近年増えている」と保育園で聞くのが、イスに座ってられない、立ってられない、腕を振って走れない子どもたち。元をたどれば、うつぶせの状態の上体を反らし、足で床を蹴り、ハイハイをすることといった、体幹が育つために大事な活動が減り、その分、「動き回らず、安全だから」「大人にとって楽だから」などの理由で赤ちゃん用のイスやクッションに座らせているから、ではないかと言われています。大人の都合でこの育ちを欠けさせたのでは、子どもは座ることも立つこともできず、スポーツどころではありません。まずは、この時間と環境の保障です。

そして、「自分で少しずつできていく」を保障する環境と大人の行動も必要です。例えば、腕や指の力が無いのに、子どもを抱き上げてうんていにぶら下げたら、落ちるだけです。自分では築山に登ることができない子どもを頂上に連れていったら、喜びはするでしょうけれども、あとは転げ落ちるだけです(登るときより降りる時のほうが難しいので)。人間の成長は、1つ飛ばし、2つ飛ばしができません。

そう考えると、遊具の中でも滑り台やジャングルジムは特に危ないとお分かりいただけるでしょう。階段1段、ジャングルジム1段を登れてしまう月齢の子どもは一番上まで行ってしまう、つまり、「できなくてもできてしまうタイプ」の遊具だからです。既に述べたように、あくまで子どもが「少しずつ確実に」できるようになる、そのような環境と方法を大人が保障することが重要なのです。

#### おわりに

子どもの育ちという価値と、子どもの「不確かさ」ゆえに起こるマイナスのリスク(事故)。リスクをゼロにしようとするれば、価値も同時に下がってしまいます。

価値を保障しようとするれば、リスクが必ずついてきます。その理解のうえに、命を奪うリスクと、成長に付随する「容認すべきリスク」を分けて考える。価値とリスクの天秤を常に考える。子どもたちが十分に育っていける社会に必要なのは、この、「リスク・マネジメント」の最も基本的な考え方なのです。